ミハイル・プレトニョフ

ピアノ・リサイタル

Mikhail Pletnev Piano Recital

2023年2月28日(火) 19時開演

東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Tuesday, February 28, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

協力：KAWAI

Program

スクリャービン：24の前奏曲 Op.11
A. Scriabin: 24 Preludes Op. 11

第１番 ハ長調	No.1 in C major	第13番 変ト長調	No.13 in G-flat major
第２番 イ短調	No.2 in A minor	第14番 変ホ短調	No.14 in E-flat minor
第３番 ト長調	No.3 in G major	第15番 変ニ長調	No.15 in D-flat major
第４番 ホ短調	No.4 in E minor	第16番 変ロ短調	No.16 in B-flat minor
第５番 ニ長調	No.5 in D major	第17番 変イ長調	No.17 in A-flat major
第６番 ロ短調	No.6 in B minor	第18番 ヘ短調	No.18 in F minor
第７番 イ長調	No.7 in A major	第19番 変ホ長調	No.19 in E-flat major
第８番 嬰ヘ短調	No.8 in F-sharp minor	第20番 ハ短調	No.20 in C minor
第９番 ホ長調	No.9 in E major	第21番 変ロ長調	No.21 in B-flat major
第10番 嬰ハ短調	No.10 in C-sharp minor	第22番 ト短調	No.22 in G minor
第11番 ロ長調	No.11 in B major	第23番 ヘ長調	No.23 in F major
第12番 嬰ト短調	No.12 in G-sharp minor	第24番 ニ短調	No.24 in D minor

ショパン：24の前奏曲 Op.28
F. Chopin: 24 Preludes Op. 28

第１番 ハ長調	No.1 in C major	第13番 嬰ヘ長調	No.13 in F-sharp major
第２番 イ短調	No.2 in A minor	第14番 変ホ短調	No.14 in E-flat minor
第３番 ト長調	No.3 in G major	第15番 変ニ長調	No.15 in D-flat major
第４番 ホ短調	No.4 in E minor	「雨だれ」	"Raindrop"
第５番 ニ長調	No.5 in D major	第16番 変ロ短調	No.16 in B-flat minor
第６番 ロ短調	No.6 in B minor	第17番 変イ長調	No.17 in A-flat major
第７番 イ長調	No.7 in A major	第18番 ヘ短調	No.18 in F minor
第８番 嬰ヘ短調	No.8 in F-sharp minor	第19番 変ホ長調	No.19 in E-flat major
第９番 ホ長調	No.9 in E major	第20番 ハ短調	No.20 in C minor
第10番 嬰ハ短調	No.10 in C-sharp minor	第21番 変ロ長調	No.21 in B-flat major
第11番 ロ長調	No.11 in B major	第22番 ト短調	No.22 in G minor
第12番 嬰ト短調	No.12 in G-sharp minor	第23番 ヘ長調	No.23 in F major
		第24番 ニ短調	No.24 in D minor

ミハイル・プレトニョフ 2023年 その他の日本公演スケジュール

2月22日（水）　東京オペラシティ コンサートホール　主催：東京フィルハーモニー交響楽団
2月24日（金）　サントリーホール　主催：東京フィルハーモニー交響楽団
2月26日（日）　Bunkamuraオーチャードホール　主催：東京フィルハーモニー交響楽団
※ミハイル・プレトニョフ指揮 東京フィルハーモニー交響楽団／ピアノ：イム・ユンチャン

〈ラフマニノフ生誕150周年記念 ピアノ協奏曲全曲演奏会〉
9月13日（水）　東京オペラシティ コンサートホール　主催：ジャパン・アーツ　共催：東京オペラシティ文化財団
9月21日（木）　東京オペラシティ コンサートホール　主催：ジャパン・アーツ　共催：東京オペラシティ文化財団
※高関健指揮 東京フィルハーモニー交響楽団／ピアノ：ミハイル・プレトニョフ

Profile

ミハイル・プレトニョフ（ピアノ）
Mikhail Pletnev (Piano)

その幅広い活動により、一言では説明できない多才な芸術家。ピアニストとして世界の頂点を極め、指揮者や作曲家としても魔法のような驚くべき才能で、世界中の聴衆を魅了している。1990年ロシア・ナショナル管弦楽団（RNO）を設立。創設者・芸術監督として世界有数のオーケストラに育て上げる。2015年4月より東京フィルハーモニー交響楽団特別客演指揮者に就任。

1957年ロシアのアルハンゲリスク生まれ。13歳で中央音楽院、1974年モスクワ音楽院に入学。ヤコフ・フリエール、レフ・ヴラセンコに師事。1978年、わずか21歳でチャイコフスキー国際コンクールのゴールド・メダル及び第1位を獲得。国際的な脚光を浴び、1988年には当時の大統領ゴルバチョフに招かれ、ワシントンのサミットで演奏した。

驚くべき技巧、深い知性に裏づけられた演奏、完璧にコントロールされた美しい音色で、カリスマ的人気を誇る現代最高のピアニストの一人として活躍。しかし、2006年、突然ピアニスト活動を停止し、世界を驚かせた。SHIGERU KAWAIピアノとの出会いにより、2013年よりピアニストとしての活動を再開。以前にも増してすばらしい演奏が話題となっている。

ソリストとしてこれまでに、ハイティンク、シャイー、ジュリーニ、ザンデルリンク、ケント・ナガノ、ゲルギエフ、ネーメ・ヤルヴィ、ドホナーニ、ブロムシュテット、マゼール、ティーレマン、ガッティ、スラットキン、アシュケナージ他の指揮のもと、クリーブランド管、サンフランシスコ響、バイエルン放送響、チェコ・フィル、フィルハーモニア管、イスラエル・フィル、サンタ・チェチーリア管等と共演。アバド指揮／ベルリン・フィルと共演した1997年のジルヴェスター・コンサート及び2000年のヨーロッパ・コンサートは、世界中にTV・ラジオ放送されている。

数多くのCDが発売され、スカルラッティの鍵盤ソナタ（ヴァージン・クラシックス）は、1996年グラモフォン賞を受賞。BBCミュージック・マガジンは、“最高のピアノ演奏”と評した。ドイツ・グラモフォンから発売されたショパンのリサイタルCDについて、著名な評論家ヨアヒム・カイザーは「今年の1枚」であると書いている。また、CD「ラフマニノフへのオマージュ」は、ルツェルン近郊のラフマニノフの家で作曲家自身が愛用したスタインウェイで録音されたが、この模様は「セルゲイ・ラフマニノフ―メモリーズ」（NVCアーツ）というドキュメンタリーに収録されている。他にも、ベートーヴェンのピアノ協奏曲全5曲（ドイツ・グラモフォン）、C.P.E.バッハの鍵盤ソナタ、グリーグ、リストの録音等がある。

作曲家としては、「Classical Symphony」、ジャズ組曲、ヴィオラ協奏曲ほか数多くの作品を発表し、近年ではスティーヴン・イッサーリスのために書いたチェロ・ソナタが大成功を収めている。

2022年新たなオーケストラ、ラフマニノフ国際管弦楽団（RIO）を創設した。

Program Notes

道下京子（音楽評論）
Kyoko Michishita

スクリャービン：24の前奏曲 Op.11

アレクサンドル・スクリャービン（1872～1915）は、モスクワ生まれ。ラフマニノフと同じ世代で、厳格な指導で知られていたズヴェーレフに師事したのち、モスクワ音楽院で学んだ。スクリャービンもまた、作曲にとどまらず、ピアニストとしても活動した。

スクリャービンは早い時期からピアノ作品の創作を手がけ、すでに1883年に《カノン　ニ短調》を作曲している。敬愛するショパンを基礎としながら、半音階的な和声や独自の和声によって、深く濃厚な表現を生み出した。

《24の前奏曲》は、1888年から96年に作曲され、翌年に出版された。スクリャービン初期の創作で、まだロマンティシズムの色香をとどめつつ、クロスリズムやポリリズム、独自の半音階が駆使されている。24の前奏曲からなり、同じ調号の長短調がひとつの対をなし、五度圏を網羅するなど、ショパンと同じ調の進行をたどる。

第１番　ハ長調／右手による五連音符を用いたクロスリズムが特徴。ショパンの《24の前奏曲》第1番へのオマージュ。

第２番　イ短調／多声的な書法が用いられている。半音階の下行動機は、重要な表現要素。

第３番　ト長調／流麗な動きのなかで、跳躍音程と音階動機を組み合わせた作品。長く引き伸ばされた音で締めくくる。

第４番　ホ短調／旋律は半音階的に下行する左手に置かれ、メランコリックな楽想。この曲集で最も早く作曲されたひとつ。

第５番　二長調／叙情的な作品で、単独でも演奏される。

第６番　ロ短調／両手によるオクターヴの運動で、模倣をともなう。

第７番　イ長調／4声の作品で、主旋律のソプラノは歌曲のように雄弁である。

第８番　嬰ヘ短調／左手の湧き上がるような分散和音の動きの上で、右手は跳躍進行と下行動機がすばやく奏される。

第９番　ホ長調／左手に導かれるように、右手は旋律を含む和音を穏やかに奏でる。消え入るような結尾は美しい。

第10番　嬰ハ短調／両手とも重音で奏され、最後は主音（♯ド）が引き伸ばされるなか、下からの分散和音で印象的に締めくくられる。

第11番　ロ長調／左手の動きはショパンの練習曲（作品10－9）を連想させる。この作品も４声で書かれている。

第12番　嬰ト短調／対話に始まり、クロスリズムやヘミオラによって複雑に展開され、最後は讃美歌のような和声表現で結ばれる。

第13番　変ト長調／楽想といい、ハーモニーの響きや左手の動きといい、ショパンの第13番の前奏曲をイメージさせる。

第14番　変ホ短調／スクリャービン特有の四度音程の掛け合いで始まる。ドラマティックな前奏曲。

第15番　変ニ長調／左手による8小節の重音の動きはくり返され、右手による旋律が加わる。その後、左右が入れ替わる。

第16番　変ロ短調／左右のユニゾンで奏され、8分の4拍子と8分の5拍子が交代する。

第17番　変イ長調／12小節のなかで、左手が奏する下行する和音動機によるアッチェレランドとリタルダンドの部分と、ア・テンポの部分が交代する。

第18番　ヘ短調／左手による三連符のオクターヴの動きに、右手が和音で応える。激しい表現の前奏曲。

第19番　変ホ長調／主部では、バスで主音（♭ミ）がたえず鳴り響く。湧き上がるような左手の動きに乗り、右手は情感あふれる旋律を奔放に表わす。

第20番　ハ短調／なだれ落ちるようなフレーズに始まる。オクターヴの運動を礎とした情熱的な音楽。

第21番　変ロ長調／4分の3拍子に始まり、5拍子や6拍子とめまぐるしく変化し、右手は問いかけるような動機を繰り返し奏する。

第22番　ト短調／左手はバロック時代のラメント・バスのように緩やかに下行。ショパンの第4番の前奏曲を思わせる。

第23番　ヘ長調／三連符で描かれる右手の動きや曲想は、ショパンの第23番の前奏曲を想起させる。

第24番　ニ短調／8分の6拍子と8分の5拍子が交互に置かれ、右手による和音の連打に左手のオクターヴの運動が激しく絡み合う。

ショパン：24の前奏曲 Op.28

19世紀後半のポーランドの作曲家フレデリック・ショパン（1810～49）は、20歳でワルシャワを離れ、後半生をフランスで過ごした。

ショパンが作家ジョルジュ・サンドと出会ったのは、1836年である。1838年秋、ふたりは別々にパリを離れ、サンドのこどもたちとともにマジョルカ島へ渡った。しかし、ショパンは体調を崩し、翌年2月にマジョルカ島をあとにした。それ以降、彼は季節の良い時期にはノアンにあるサンドの別荘で過ごし、そこで作曲の筆を執った。

《24の前奏曲》の本格的な創作が行なわれたのは、ショパンのマジョルカ滞在中であるが、それよりも早い時期から作曲は始められた。そして、彼がフランスへ戻った1839年に完成をみた。

ショパンがマジョルカ島へ渡る際、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》をたずさえていたことは彼の書簡からわかっている。バッハと同様に24の調がすべて用いられるなど、彼の《24の前奏曲》にはバッハのこの曲集からの影響がうかがわれる。

《24の前奏曲》は、同じ調号がひとつの対をなし、五度圏をたどって作品は進んでいく。この前奏曲集は、8曲で一つの大きなまとまりをなす。また、作品間のモティーフの関連も指摘される。

Program Notes

第１番　ハ長調／三連符の分散和音から、希望に満ちた旋律線が紡ぎ出されてゆく。
第２番　イ短調／低音部の和音の刻みに導かれ、メランコリックな旋律が奏でられる。
第３番　ト長調／流麗なパッセージの波の上で、清々しい旋律が歌い上げられる。
第４番　ホ短調／半音階で下行するバスは、ラメント・バスを思わせる。
第５番　二長調／ポリフォニックな書法で書かれ、拍節が変化し、複雑なリズムの綾が生み出されている。
第６番　ロ短調／右手の和音動機を背景に、左手はほの暗い旋律を奏でる。
第７番　イ長調／旋律に含まれる付点のリズムは、典雅な雰囲気をもたらす。
第８番　嬰ヘ短調／ポリフォニックな作品で、内声の付点リズムは第1曲の動機を想起させる。
第９番　ホ長調／和声表現の澄明な前奏曲で、ソプラノとバスの二重唱になっている。
第10番　嬰ハ短調／軽やかに駆け降りる右手のパッセージと、和声書法の穏やかな表現が心地よいコントラストを生み出す。
第11番　ロ長調／歌曲を連想させる即興曲ふうの作品。
第12番　嬰ト短調／左手による荒々しい和音の上で、右手の旋律は半音階を重い足取りで上行する。
第13番　嬰ヘ長調／夢想的な曲想と、彩り豊かな和声の変化がさまざまな表情を生み出す。
第14番　変ホ短調／一陣の風のように駆け抜ける両手のユニゾンは、ショパン《ピアノ・ソナタ第2番》第4楽章を彷彿とさせる。
第15番　変ニ長調／「雨だれ」の名で知られる。左手による同音連打の上で、右手は情感あふれる旋律を歌う。
第16番　変ロ短調／導入部や調、曲想など、彼の《ピアノ・ソナタ第2番》第1楽章との関連が指摘される。
第17番　変イ長調／2小節の導入に続き、右手は旋律を奏でる。歌曲を思わせるような作品。
第18番　ヘ短調／激しいユニゾンに衝撃的な和音で応える表現。
第19番　変ホ長調／両手の広い分散和音のなかから、旋律が湧き上がる。
第20番　ハ短調／重厚な和音や厳かな付点のリズムは、葬送行進曲を連想させる。
第21番　変ロ長調／低音部の2つの声部は、反進行の動機を特徴とする。
第22番　ト短調／左手の鮮やかなオクターヴの進行に、右手は和音で応える緊張感あふれる作品。
第23番　ヘ長調／右手の分散和音とともに、左手はトリルをともなう旋律を伸びやかに歌う。
第24番　ニ短調／左手による振幅の大きな分散和音と、雄渾な旋律が情熱的に奏される、スケールの大きな終曲。